父への手紙

大山務憲

前略　親父さま

今日は十月三日、あなたの命日です。仏壇にあなたの好物の甘菓子を供え、妻と二人であなたを偲んでいます。

あなたが旅立たれてすでに永い年月が経ちました。勿論、妻はあなたの事を知りません。息子の私ですらあなたの映像は、寂しくもすでにセピア色化した記憶なのですから…。

当時二十六歳だった私も、すでに高齢者と言われる七十三歳。「親の五十回忌をするなんて不幸な親子なのね」と妻に言われながら、一年後のあなたの法要についても話し合っています。

あなたの眠っている四国はやはり遠いです。熟慮の末、我が家の近くに墓地を買いました。慣れない土地でもあなたが寂しくないように、小高い丘の、住宅地に囲まれた明るい場所を選びました。遠くには西山連峰を眺め、眼下には幼子の可愛い声が絶えない桜の木に囲まれた保育園があります。孫を抱かせてあげられなかったせめてもの思いも込めて…。

近々改葬予定です。これからは近くになるので、度々お逢い出来ると思います。親父さま、それでは又お便りします。

平成二十二年十月

草々

前略　親父さま

四月二十三日、大変デス！　気楽に受けた人間ドックで食道癌との告知。医者はさり気なく淡々と説明し、生検、主治医決定、検査入院等々…。ベル

トコンベアーに乗せられた魚の如く、私自身は、なす術もなく事の推移を見守るだけでした。

あなたの血を受けた息子として、脳梗塞の心配はしていましたが、今や二人に一人は癌に罹る時代と認識していながら、愚かにも他人事だと侮っていたので、信じ難い現実のまえに、おろおろするばかりです。

おまけに検査入院中に下咽頭癌も判明、正にダブルパンチ。早期癌と慰められても、下咽頭癌は場所が悪く声帯切除との説明。…親父さま、残念です。今、私は何の症状もなく、元気そのものなのに…。

医師団の総合診断や、私が声帯温存を望んだ結果、手術は避け放射線と抗癌剤による化学治療に決定。以後百日に及ぶ治療が開始しました。

記録的な酷暑の中、妻は連日病院に通いつめ、子供たちと共に様々な情報を集めて医者と面談を重ね、私を慰め励まし続けてくれました。

仕事人間で家庭を省みず、母子家庭のような環境の中、息子達は優しく育

ってくれました。これも偏に妻のおかげです。
家族の絆を改めて、肝に銘じた一夏ではありました。
それでは又、お便りします。

平成二十三年夏

草々

追伸

あなたが病に倒れた昭和三十年代は医療全般が遅れており、介護も不自由な中、寝たきりのあなたの願い事に応えることが出来ないどころか、青春真っ盛りの私には、むしろあなたの存在すらが重荷でした。励ましや、労りの言葉はおろか、冷酷な愚痴をなげかけたものです。

あれから三十年…。あなたが逝った五十六歳になったとき、私は二人の息子にも恵まれ、仕事もそれなりに満足のいく立場にあり、人生を謳歌。それに比べて親父さま、あなたは心残りで、無念だったでしょう。「お前が大きく

なったら、俺も楽ができるわい」。…嬉しそうに話していたあなた。息子の結婚も見ず、やりたいこと、見たいことも残したまま、あなたは生涯を終えました。酒が飲めないあなたでしたが、話をいっぱいしたかった。

私がそちらに行った折には、不幸の数々をお詫びし、共に盃を傾けましょう。

それが遠い遠い先でありますようにと願っています。あなたの無念な残りの人生も、私が生きるために…。